シーワールドのアニマル達

●飼育20年を迎えた動物達

鴨川シーワールドは昭和45年にオープンしてから今年で20年の歳月が流れました。そして、この20年間にわたる鴨川シーワールドの歴史と共に歩んで来た動物達として、フンボルトペンギンの「赤白（アカシロ）」、ゴマフアザラシの「リック」、カリフォルニアアシカの「ノロ」と「モコ」がいます。ここでは、これらの動物達について感謝の気持ちをこめて簡単に紹介してみることにしましょう。

フンボルトペンギンの「赤白」は、昭和45年の秋に他の９羽と共に南アメリカより当館に到着しました。そして、この20年間に15羽のヒナを育て、今では孫も10羽おり、当館のペンギンファミリーの中のビッグファミリーを作っています。しかし、この「赤白」も昨年は９年間連れ添った最愛の夫である「黄青（キイアオ）」に先立たれ、しばらくさびしい毎日を送っていました。ペンギンはペアのきずなが強いだけに心配していましたが、どうやら最近、新しい恋人を見つけたようでひと安心をというところです。

フンボルトペンギン
Spheniscus humboldti
「赤白」

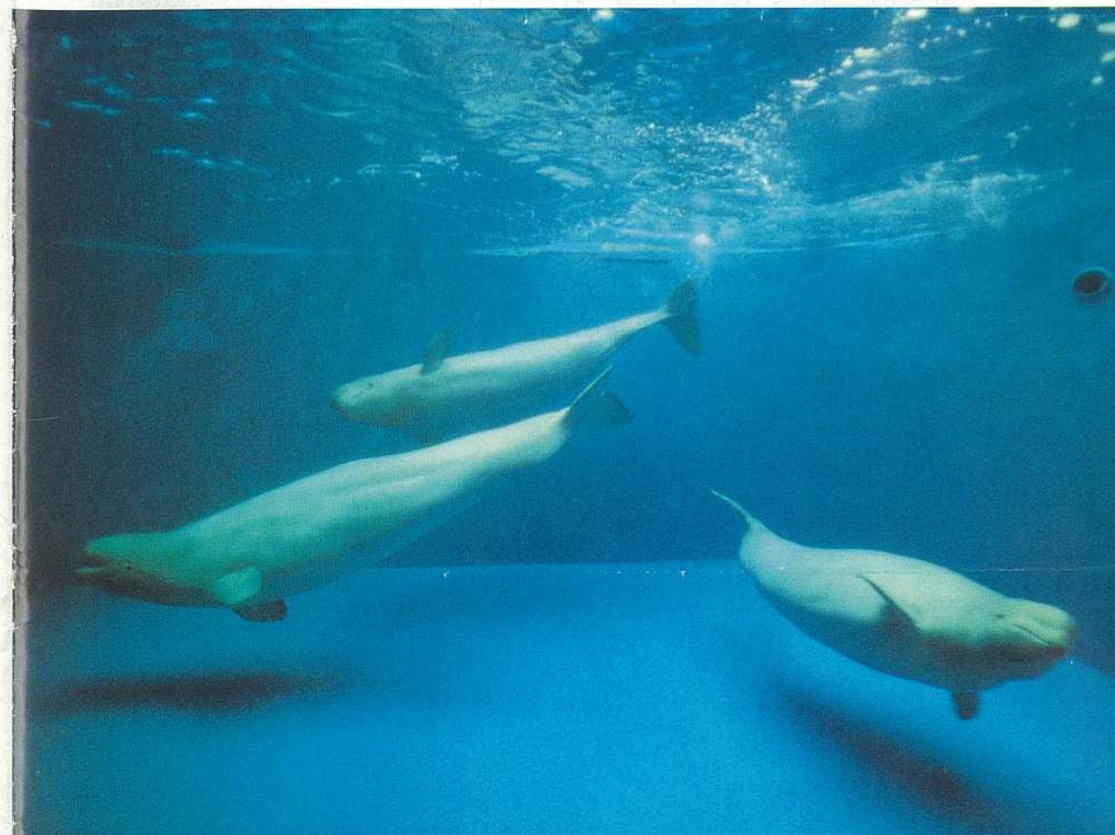
ゴマフアザラシ
Phoca largha
「リック」

カリフォルニアアシカ *Zalophus californianus*
「ノロ」　「モコ」

日本の動物園、水族館の中で最も多くの子を産んでいるアザラシが、ゴマフアザラシの「リック」です。昭和49年の初産は残念ながら死産でしたが、その後は豊かな母乳で９頭の子を育て、まさに日本一のお母さんアザラシとなっています。日なたぼっこが大好きで、晴れた日には子と孫に囲まれて昼寝をしている堂々たるからだのリックを見ていると、何か不思議と心が安らぐ気がします。

当館のオープン時よりアシカショーのスターとして大活躍しているのがカリフォルニアアシカの「ノロ」と「モコ」です。オスの「ノロ」は搬入当初、動作が鈍かったため、「のろま」の「のろ」より名付けられましたが、その後の訓練により芸達者ぶりを発揮してくれ、「浦島太郎」や「水戸黄門」など好評を博したアシカショーの主役をつとめてくれました。メスの「モコ」は、整った顔付きとソプラノの美声の持ち主で、「ノロ」の相手役として、常に活躍するとともにテレビ局のスタジオにも出向いて演技を披露するなど、当館のアシカチームのザ・コミカルズの看板女優の座をしめていました。しかし、「モコ」は昭和57年「ノロ」は昭和62年にそれぞれ後輩にスターの座を譲り、子孫を残すためにリタイヤーしました。そして、「モコ」はその後２頭の子を産み、「ノロ」は昨年２頭の子の父親になりました。「モコ」の最初の子の「ジェニー」は小柄ですが母親ゆずりの愛らしい顔立ちをしていて、早くから才能を発揮し、現在アシカショーの２代目スターとして活躍しています。

これらの動物達が、元気でさらに長生きをし、彼等の子孫達が活躍することを願っています。

（荒井）

世界の自然をわたし達の手で護りましょう!
●会員になりたい方は入口の総合案内所に御相談ください。
●会員にはパンダのバッヂと月刊誌の会報が送附されます。
※会費は年額3,000円です。
財団法人 世界自然保護基金日本委員会
〒105東京都港区芝3丁目1番14号日本生命赤羽橋ビル7Ｆ ☎(03)769-1711

さかまた No.36
（禁無断転載）
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日 平成２年12月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 36

KAMOGAWA SEA WORLD

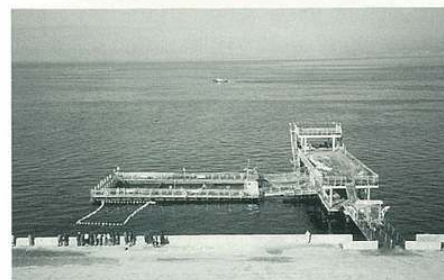
ソ連から やってきた ベルーガ

当館でのベルーガ（シロクジラ）の飼育は、昭和51年にカナダのハドソン湾に注ぐチャーチル川で３頭を捕獲し、日本ではじめて飼育を始めてから14年が経過しました。その間には12年間飼育した個体の死亡や新しい個体の搬入などがあり、平成２年当初には昭和63年に搬入した若い雄の「ナック」１頭だけが飼育されていました。そこで、まだ当館では実現していない繁殖を成功させることを目的として、カナダ政府へ新個体の捕獲許可を申請していましたが、今年はベルーガの捕獲許可証は発行しないとの連絡を受けたため、来年以降への期待をかけて今年はあきらめていました。ところが今年の春先になり急テンポでソ連からのベルーガ搬入の可能性が高まってきたので７月に訪ソし、ウラジオストクで飼育しているベルーガの下見と交渉をおこなった結果、10月24日日本で初めてソ連からベルーガ３頭を搬入することができました。

●ベルーガの飼育されていたウラジオストク市とは

ソ連の極東地域で最も日本に近い都市の１つがウラジオストク市です。ウラジオストク市は、北緯43°東経131°に位置し、日本の札幌とほぼ同緯度にある人口65万人の港湾都市で、造船、水産加工等が盛んである一方、ソ連太平洋艦隊の基地として重要な場所となっています。また、かつてのシベリア鉄道の東の起点としても知られています。街にはレンガ造りのヨーロッパ風の建物が多く、緑の多い美しい街並が続き、坂の多いところから「極東のサンフランシスコ」とも呼ばれています。現在は外国人には市内での宿泊が許可されていないため、「ベールに包まれた都市」と称されていますが、平成３年１月１日からは、観光も含め全面的に開放されるとのことですから、これからは多勢の人々がこの美しいウラジオストクの街並にふれる機会をもつことができるようになることでしょう。

●ベルーガの飼育施設と環境

ベルーガは波静かなアムスキー湾の一角に設置された網いけすの中で12頭が飼育されていました。

▲ソ連ベルーガ飼育プール

そしてこの飼育プールは、岸壁より約50m離れた水深５mの沖合に設置され、24m×12mの網いけす３枚で３区画に仕切られていました。また飼育環境は冬期－1.5℃、夏期20.0℃、気温は1月－13.4℃、８月20.3℃と鴨川とは全く異る気候です。この施設は地元では「水族館」と呼ばれていて１日数回、約10分間のベルーガショーが行なわれていました。なお、現在飼育中のベルーガの捕獲と輸送について問い合わせたところ、オホーツク海サハリン湾にて巻網で捕獲後、ウラジオストクの飼育プールへ船やヘリコプターで輸送したとのことでした。

●ウラジオストクでの取り揚げ

鳥羽山館長を隊長とする輸送隊6名は10月19日、新潟空港を出発しハバロフスク経由で21日にウラジオストクに到着しました。しかしベルーガの輸送用コンテナは、日本からの積出しを早くから準備したのにもかかわらず、９月末から再三の台風の影響により、横浜港からの出港が大巾に遅れたため、輸送隊の手元に届いたのは輸送前日の22日夕刻となってしまいました。そのため、それからおこなわれた輸送のための準備作業は、かなりあわただしい中でおこなわれました。

▲夜間行なわれたベルーガ取り揚げ作業

10月23日、午後８時40分、いよいよ取り揚げ開始。輸送する３頭を収容してある網いけすを岸に引き寄せ、ソ連のスタッフと共に当館のスタッフも水中に入いり、１頭づつ捕獲して担架に乗せ、クレーンで吊り上げて輸送用トラックの上に置いたコンテナに収容します。コンテナの中には、長時間輸送によるベルーガの自重からおこる障害を防ぐため、浮力を与えておくように水深40cmの水が張ってあります。作業は夜間であったものの１時間という短い時間で終了しましたが、しかし全ての作業が決してスムーズであったとはいいきれませんでした。それは夜間作業にもかかわらず照明が不足していたこと、そしてソ連のスタッフが今回の様な取揚げやその後の輸送方法に初体験であったため、動物の取扱いに関しての知識が不十分であったことなど色々な問題がかさなり生じたものです。

●日本への輸送

空港に到着し、気温が０℃近くまで下降する中待機すること約３時間、ようやく飛行機への積み

▲飛行機への積載

込みが開始されました。飛行機はフルチャーターした、アエロフロート・ソ連航空のイリューシン76で、ソ連最新鋭の貨物専用機です。荷物の積み降ろしは、機体の最後部より行なわれ、重さ５ｔもあるコンテナが、機内に備え付けられたウィンチにより、簡単に持ち上げられ機首の方へ運ばれます。ベルーガを収容したコンテナ３台は縦列に固定され、ベルーガが暴れた時に水が外に出ない様にコンテナの上に毛布を掛け出発準備は終わりました。そしていよいよ成田へ向けて出発！ところが、いっこうに飛行機が動く気配はありません。予定時間が大巾に過ぎ、何かトラブルが発生したのではないかと心配顔のスタッフの横では、３頭のベルーガが相変わらず暴れて水を飛ばしています。そして待つこと２時間半。当初予定していたウラジオストクから成田への直行が急きょハバロフスク経由に変更となり、チャーター機はようやく24日朝９時40分にウラジオストク空港を離陸しました。

ハバロフスク空港では、通関手続きをしている間、空港関係者が機内におしかけベルーガ達もちょっとした人気者でした。

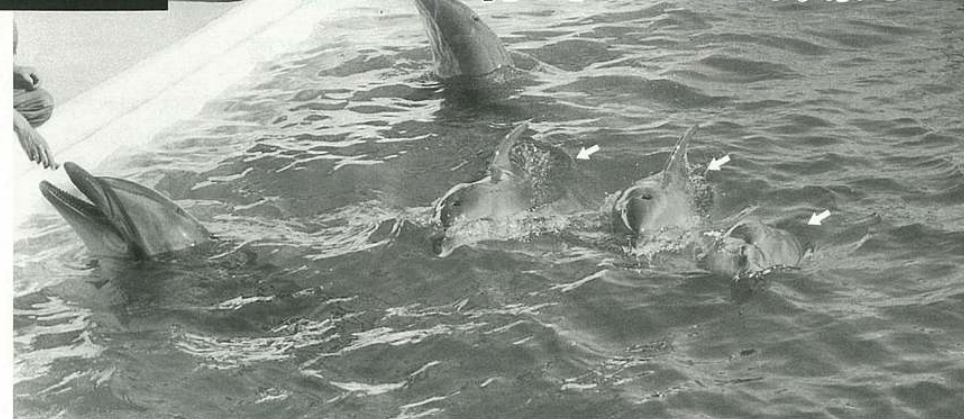
機内は10℃に保たれ、また会話もろくに出来ない程の騒音の中、３頭のベルーガは異常もなく、すこぶる良い状態で午後１時10分に成田空港に到着しました。

▲成田空港ー鴨川間を走る冷凍車

成田空港からは、気温15℃、水温14℃に保たれた冷凍車３台にベルーガを１頭づつ積み込み、取り揚げ24時間後の午後７時に鴨川シーワールドに無事到着しました。

これまで飼育していたベルーガは、カナダ・北大西洋産ですが、今回の３頭は北太平洋産です。両者はもちろん同じ種類ですが、外形的にはソ連のベルーガの方がカナダ産よりも太っていて、一見してプロポーションの違いが目立ちます。しかし、それ以外の点については、これから両者を比較しながら生態的な問題も含め調べていきたいと考えております。現在３頭のニューフェイス達は、旅の疲れをいやしていますが、お正月には一般公開し皆様に御覧頂けるようにしたいと考えています。（金子）

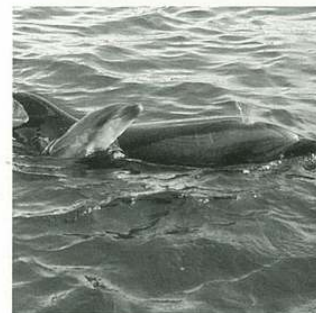
▲マリンシアターへ無事搬入

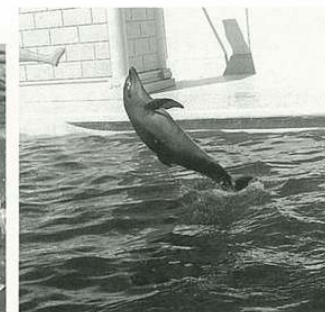
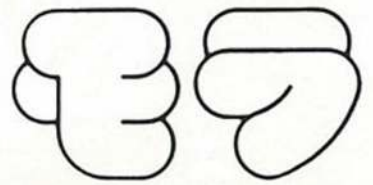
トピックス バンドウイルカの 仔イルカ３頭誕生

今年、鴨川シーワールドのイルカプールではイルカの出産が相次ぎました。元気な赤ちゃんを生んだのはバンドウイルカの「ノーマ」、「スリム」、「ヘレン」の３頭です。６月６日に「ノーマ」、26日に「スリム」、そして７月２日に「ヘレン」が出産し、イルカプールは大にぎわいとなりました。

バンドウイルカの繁殖は、当館以外でも、これまでに多くの例がありますが、３頭の仔イルカが１つのプールで同時に見ることができるのは、極めて珍しい例といえます。そのため、バンドウイルカの出産後の親子関係を中心としたグループでの生活行動を知る上でも貴重なデータが得られるものと毎日観察を続けています。

出産後は母イルカと並んで泳いでいた仔イルカ達も、約５ケ月が過ぎた現在では、１頭で泳ぎ回ったり、仔イルカ同士で遊んだり、時にはプールサイドの係員に興味を示して近寄ってきたりするなど、はやくもやんちゃぶりを見せ始めてくれています。

これからの成長が楽しみなこの３頭の仔イルカ達。皆様の期待にそうよう大事に育てていきたいと思っていますので、どうか応援していて下さい。

（高田・斉所）

母親のヘレンと一緒に泳ぐ仔イルカ（出生直後）

子育てベテランのスリムと仔イルカ

見よう見まねでジャンプ！
遊びを覚えはじめたノーマの子

●大阪の新設水族館への技術指導

平成２年７月20日、大阪に都市型巨大水族館（海遊館）がオープンしました。鴨川シーワールドではこの新しい水族館のため、オープン前の６月から５ヶ月間係員２名を派遣し、動物の飼育管理の技術指導を行ないました。海遊館は中央にある太平洋をイメージする大水槽（水量5400トン）の周囲に環太平洋火山帯によってつくりだされた様々な自然環境と生物を展示する13の水槽が設置された水族館です。オープン２ヶ月前には、最終工事が進む中で昼夜を問わず次々と搬入される動物の受け入れと初期飼育に、ヘルメットをかぶりながらの夜を徹した作業が続きました。そのかいもあり当初の計画通り無事オープンを迎え、今では、多勢の利用者に楽しんでもらっています。（岡田）

●波と魚の水槽

水族館で飼育されている魚達は、自然界における荒波とは無縁な静かな環境に棲んでいます。そこで、自然に少しでも近い状態を水槽内に再現し、その時の魚の行動を観察してもらおうと波動装置を新しく設置した水槽を設けました。この装置は全て手造りで水面付近で三角形のフロートを上下に動かし波を発生させるものです。装置は上下のストロークの長さで波高を調節できるようになっていますが、海岸線の模型などの大きさを考慮しながら水槽の表層にだけ波ができるように工夫して海岸線に打ち寄せる波の様子をうまく表現することができました。波の影響を受けずに水底付近を泳ぐ魚と表層で波に漂よう魚の動きの違いを波の様子と併せて観察してみて下さい。（庄司）

●オープン20周年記念日の催し

10月１日、鴨川シーワールドはお陰様でオープン20周年を迎えることができました。これも一重に当館をご利用いただいた皆様方のご協力の賜と感謝しております。

当日は20周年記念日として、開園と同時に20発の花火が台風一過の秋晴れの空に勢いよく打ち上がり、記念日を盛り上げました。また、入園時には「ちびっ子達」にバッチがプレゼントされた他、お客様全員にジュースのサービスと当館のシンボルマーク「オルタン」のグッズが当たるビッグな抽選会も行なわれ、20周年記念日の催しは盛況のうち終了しました。（大屋）

●守ろう海の仲間たち

当館では、６月第１週の環境週間の協賛行事として、６月から３ヶ月間ピノキオハウスにおいて「Clean the Ocean, Save the Sea Animals ―守ろう海の仲間たち―」と題したパネル展を行ないました。海洋汚染の現状と、その海で生活する動物達を紹介し、海洋汚染がこれらの動物に与えている影響について考えてみました。自然保護を訴えるパネルやビデオを子ども達に説明する家族連れの姿に、環境問題への関心の高さがうかがえました。この快適な地球環境に異変が起きていることを真剣に考え、かけがえのない海と動物達をこれからも大事に守ってゆきたいものです。（岡田）